JAFスポーツWEB

2018年JAF全日本ジムカーナ選手権第5戦　2018年JMRC北海道ジムカーナシリーズEXラウンド
オールジャパンジムカーナ［JAF公認No.2018-8205］

開催日: 6月16〜17日　開催場所: オートスポーツランドスナガワ　格式: 国内
主催: CSCC［クラブ登録No.加盟01024］、AG.MSC北海道［クラブ登録No.公認01001］

フォト／加藤和由、JAF スポーツ編集部　レポート／ JAF スポーツ編集部

斉藤邦夫ロードスター、完璧なパイロンワークで２勝め獲得

「やっとライバルに追いついた。後半も離されないようについていくよ」。PN1クラスで今季2勝め獲得の斉藤邦夫選手。

全日本ジムカーナ選手権のシリーズ前半を締め括る第5戦は北海道オートスポーツランドスナガワで開催された。

石狩川の河川敷に広がる同コースは、フラットな高速コース。コースの大半は大小の島が配されたコースジムカーナになるが、コース端部、パドック手前はパイロンセクションとなっており、8の字、タイトスラローム等をこなしてゴールというのがスナガワの定番だ。

広さで言えばコース全体の1/4程度のこのパイロンセクションの出来不出来がタイムに直結するとあって、高速コースとは言え、“踏んだモン勝ち”になるとは限らず、オールラウンドな技が求められる。加えてコース部分とパイロン部分の路面グリップが異なるのも大きな特長で、それを踏まえたドライビングもポイントだ。

こうした路面の特長も影響してか、ここスナガワはヒート2でタイムアップを果たすことも容易ではなく、時にヒート1のタイムで勝負が決することも。今回も各クラスで2本のタイムが拮抗し、ヒート2でタイムダウンする選手も少なくなかった。

ND5RCロードスターの事実上のワンメイクとなったPN1クラスでは、ヒート1、青森の上野健司選手が1分34秒474で暫定トップに立つ。ヒート2、地元北海道の米澤匠選手がヒート1のペナルティを挽回する1分34秒041を叩き出してベストを塗り替えるが、その後のドライバーは35秒台に止まり、ラス前の福田大輔選手も34秒965とタイムダウンに終わってしまう。

ラストゼッケンの斉藤邦夫選手も前半は米澤選手に0.4秒のビハインド。米澤選手の地元での全日本初優勝の気配が濃厚になるが、ゴールした斉藤選手のタイムは34秒台を突破する1分33秒816。土壇場で

PN1／*1.2.* ホームコースで全日本初優勝にあと一歩に迫った米澤匠選手だったが（*1.* 左＆*2.*）、斉藤選手の完璧なパイロンワークにその夢は阻まれた。*3.* 暫定首位を奪うも逆転を許し、3位に甘んじた上野健司選手。*4.* ポイントリーダーの福田大輔選手は4位にとどまった。

PN2&PN3 ／ **5.**「一番勝率の高いコースで気持ちよく走れたので満足している」。PN2は山野哲也選手が今季3勝めを獲得。**6.**PN2河本晃一選手は2位まで挽回してゴール。**7.8.** 第3戦エビスから3連勝と流れを掴んだPN3ユウ選手。**9.**PN2で4位入賞の工藤典史選手。**10.**PN3で4位入賞の西野洋平選手。**11.**PN2で前戦優勝の松本敏選手。今回は3位。**12.** ヒート1MCのPN2川北忠選手は2位でゴール。**13.**PN3天満清選手はロードスター RF勢最上位の3位入賞。

SA1&SA2 ／ **14.**SA1で2位入賞の橋本克紀選手。**15.**SA2で2位入賞の佐藤巧選手。**16.17.**「2本ともミスはありました。それでも勝てたのはコースに慣れてる地の利を生かせたからだと思います」。SA1はスナガワでジムカーナの腕を磨いた小武拓矢選手が今季初優勝。**18.**SA2で4位に入った朝山崇選手。**19.**SA1の4位は服部諒一選手。**20.21.**SA2は澤平直樹選手が今季初優勝。タイトルレースに絡んできた。**22.**SA2高江淳選手はヒート1のタイムで3位。**23.**SA1の3位は一色健太郎選手が入賞。

逆転を果たした斉藤選手がシーズン2勝めをマークした。

「皆、タイムダウンしてたけど、2本め、スタートした直後は、“これくらいなら攻められるな”というグリップ感だった。コース主体の前半部は1本めもライバル達に負けてたから、そこを同じタイムで走ろうとしてペナルティを受けるリスクを背負うよりは、昨日から調子よかったパイロンをうまく走ろうとしたんだよ。実際、ここで1本めミスしたり、足りなかった所を修正できたことがタイムアップに繋がったと思う」と斉藤選手は後半区間で0.5秒詰めたことを真っ先に勝因にあげた。

PN3クラスは2連勝と調子を上げてきたユウ選手がヒート1、唯一の1分33秒台をマークして暫定トップに立つ。しかしペナルティを引いたタイムでは西野洋平選手が同じく33秒台でユウ選手を上回り、ミスコースに終った川北忠選手の存在もあって予断を許さない情勢だ。

27. 台数不足により不成立となってしまったSA4クラスは津川信次選手がトップタイムをマークした。**28.**同2位のタイムをマークした村上公一選手。

JMRC北海道シリーズEXラウンド／**24.**86/BRZクラスは目黒賢一選手が優勝。**25.**R-1クラスは綱島寛太選手が優勝。**26.**R-2クラスでは逸見将吾選手が優勝。

しかしヒート2に入るとこのクラスもタイムダウン傾向が顕著に。川北選手も34秒台にとどまり、西野選手も35秒台でゴール。一方、結果的にウイニングランとなったユウ選手は33秒123までタイムを上げる快走を見せ、3連勝と今回も強さを見せつけた。

タイムを見れば完勝だが、斉藤選手同様、前半区間はライバルに先行されたことについては、「1本めも2本めも、前半は昨日の路温の記憶が残ってて微妙にリズムが合わなかった」とユウ選手。「だから、途中からヤバイと思って一生懸命合わせたんです」と決して楽勝でなかったと明かした。「こういう中途半端な気温の方がどっちかという苦手なんで、夏の方が好きですね。最初からタイヤが喰ってくれるんで」と連勝記録の更新に意欲を見せていた。

一方、SA2クラスはヒート1から、暫定首位の高江淳選手に佐藤巧選手が0.007秒差で続くという白熱した展開に。ヒート2では佐藤選手が1分32秒528までタイムを上げたのに対して、高江選手は痛恨のパイロンタッチ。勝負あったかと思われたが、ラストゼッケンの澤平直樹選手が32秒196までタイムを上げて今季初優勝を飾った。

「ずっと勝てなくて気持ち的には追い込まれた週末でしたが、前向きに持っていけるようメンタルをコントロールできたと思います。苦手な前半の高速区間で皆に負けないセットが出せて、セオリー通りの高速の走らせ方ができたのが勝因だと思います」。関東出身のパイロンスペシャリストだけに、コース区間を攻略できた結果の勝利に最後は安堵の表情を見せていた。